



▼今回の特集は西山茂・東洋大学教授にご登場頂いた。前号では『石原莞爾選集(10巻)』を出版した玉井日禮師にご登場頂いたが、西山教授はその8巻目(日蓮聖人伝覚え書/国防論)の解説者である。今回は特に石原莞爾将軍がドイツに留学直後に起きた88年前の関東大震災(1923年9月1日)をメインテーマにお伺いしたわけだが、被災の報を聞いた石原将軍とこの度の東日本大震災で衝撃を受けた現在の私たちとは、克明に記録していた「日記」から、心情的に全く一致していたことが、よく窺うことができた。

しかも、石原将軍の集大成とも言うべき「世界最終戦論」は、留学先のドイツのハイパーインフレに見舞われていた経済的苦境とも相重なり、「終末的」な状況から生み出されたことも初めて知ることとなった。いわば、天災と人災のダブルパンチだが、今回の東日本大震災の特徴は、福島第1原発の放射性物質の世界的拡散という人災があったことである。前号でも述べたように、福島原発の事故が「まだ最悪を免れている奇跡」とするなら、原発を「全廃」することが、今後の世界の真の安全のためには必須不可欠と思う。

内政、外交、何もかもダメな民主党政権だが、菅内閣には文明史的大局観に立って、少なくともこの「脱原発」「原発全廃」には道筋をつけてもらいたい。また、今後の電力供給には「発電・送電」を分離する必要性があり、そのための再生エネルギー特別措置法案は、是非と

も野党も協力して成立させるべきである。

日本は火山列島ゆえ、天然ガスは豊富にあり、その発電技術もあり、さらに太陽光、風力、水力、水力など潜在的に代替エネルギー環境は整っており、来年に54基すべての原発を停止しても何ら心配ない。今夏さえ節電で乗り切れば、あとは新たな技術の創生で「日本は世界の次世代社会のモデル」を示すことができる。これこそが、石原将軍が描いた「核の無い人類後史」「永久平和」時代の到来、とすることができよう。

新井克輔先生が逝去された。先生は生前、国柱会(東京・江戸川区一之江)での「墓前祭」に毎年出席され、さまざまな名曲を聞かせて下さった。アクロバティックな名演奏後の、いつも物静かで気品あふれる笑顔が忘れられない。(S)▼戦争は「兵器という道具」を用いた闘争だから、私の軍事問題へのアプローチ方法は、兵器の研究から始めた。その中で特に第二次世界大戦の主要各国の諸々の兵器には、その国のお国柄と言うか国民性、あるいはその時の事情がうかがわれて大変興味深いものがある。

陸戦兵器の「花形」たる戦車について言えば、ソ連の戦車が興味深い。ドイツのティーガー戦車の分厚い装甲を打ち抜くために特化したかのような戦車や自走砲が数多く開発されている。それらは汎用性や人間工学などお構いなしの設計だし、兵士と同様に「兵器は消耗品」とのコンセプトが感じられる。因みにタンクデサント(戦車に数名の兵士を騎乗させての突撃戦法)など、兵士を最も過酷に扱ったと言う点では日本軍以上だったように思える。

軍艦については、アメリカ主要艦船の「直線

的な設計」に、プラグマティズム(実用主義)を感じる。そこには「兵器は工業製品であって、工芸品ではない」とでも言いたげな「分かりやすい」合理主義がある。

日本の軍用機には、ドイツのような独創性や斬新さ、アメリカのようなダイナミックさは感じられないものの、流麗なラインでまとめられ、「これが兵器なのか」と思わせる軍用機が多い。

その背景には主要各国の中では工業基盤が脆弱で相対的に技術開発力や生産力が低かったということがあるが、それを少しでも補おうとする工芸品のような緻密な設計がなされている。

兵器の進化は生物の進化に似ている。列車砲や戦艦それ自体は欠陥兵器ではなかったが、航空機の発達の前に姿を消した。その航空機も戦略爆撃機などで巨大化した。弾道ミサイルにその地位を奪われた。兵器の開発は「人類の闘争」である同時に「壮大な無駄」でもある。(Y)

★発行所 石原莞爾平和思想研究会

〒179-0076 東京都練馬区土支田3-46-7
山崎方

TEL 03-3923-1937 (FAX兼用)

郵便振替 00130-9-410942

発行人 植田英一 編集人 鳥田守康

定価 200円(送料別)

会費(年間) 篤志会員 10000円以上

一般会員5000円、誌友会員4000円

第117号 平成23年(2011年)7月25日発行